

「逆境をバネにした川上村の挑戦」

講師：藤原忠彦氏（長野県川上村村長）

日時 2014年2月6日（木）午後7時～8時45分

場所 東京都港区六本木5-12-22（株）環境デザイン研究所 会議室

川上村は長野県佐久郡に位置し、年間平均気温8.1°C 人口4,300人弱の農村です。この小さな農村が“高原の恵みを生かして育てる日本一のレタス王国”として日本のみならず、東アジア地域からも大変多くの注目を集めています。

野菜の総取扱高 159億2,376万円（平成23年）

レタス出荷量 62,604t（平成23年） ← 日本一！

■ “高冷寒村から農業立村へ”

明治30年代に島崎藤村が川上村を訪れ「千曲川のスケッチ」に記した当時、川上村は秩父連山に囲まれた奥深い山村で、山梨・群馬・埼玉の三県に接する、信州ではさいはての地であったといわれる程隔絶された地域だったそうです。

そんな高冷地気象環境の川上村は、昭和6年長野県農村恐慌対策による臨時産業振興策の中に、果樹・花と共にそ菜が含まれ、野辺山高原一帯がハクサイ栽培に適することが判明し、昭和9年川上村野辺山高原で出荷用としてはじめてハクサイが栽培されたそうです。

そして川上村に訪れたビッグチャンスが昭和25年の朝鮮戦争特需。朝鮮半島で戦うアメリカ兵に供給するレタスの栽培地として生産を開始したこと。当時日本ではほとんど馴染みのなかったレタスを大規模に生産したことが今日の川上村の原点となったようです。

更に朝鮮戦争終戦と同時に迎えた日本国内の復興景気で需要が拡大し、生産量もどんどん増加したそうです。

川上村成長の3つのポイント。

- ① 朝鮮戦争特需（復興の時流に乗った）
- ② 土地資源があった
- ③ 日本の人口増時代に乗った

現在川上村は極めて安定した農業生産体制により、農業で十分生活可能な環境が構築できているそうです。（農家戸数約600戸／販売実績約160億円／平均販売額2千万円～3千万円戸）農業従事者の平均年齢も29歳と若く、後継者不足の心配もないためますます専業農家が増加する傾向にあるそうです。そして、農家のお嫁さんも東京などの都会から嫁いでこられる方が大変多く、日本の農村が抱える課題とは真逆の環境づくりができているようです。

■地域づくりのキーワード

独自の成長路線を走る川上村にも危機がありました。

農家収入が増加し続けた時期（ピーク時平成5年は平均3千万円／年戸）、マネー競争やギャンブル依存等お金にまつわることが要因で村の雰囲気が大変悪くなったのです。

そこで藤原村長はダイナミックな政策転換に着手されます。

そのキーワードは、

衣食住 + 「情」（情報）と「三コウ」（交通・高齢化・交流）

農家と行政の役割分担を明確にしようという発想です。

衣食住は個々の農家がそれぞれ担うこと。情報と三コウは行政が担う領域。

メディアの発達・多様化により川上村にも情報が流入してきましたが、広域の情報が先行し最も肝心の村の情報が一番遅いことに気付き【農村情報システム】の構築を発想されました。

これはいわゆるCATVですが、当時まだ普及途上にあつたシステムを一小農村のみに導入した画期的な取り組みだと思えます。（昭和58年から計画し昭和62年供用開始）

一般TV放送の難視聴地域だった村に多チャンネル視聴を可能とした点はさておき、最大の功績が〈野菜の市況情報〉をリアルに確認できることと〈精度の高い気象情報〉を提供したことです。市況情報は出荷当日の価格推移が確認でき、その状況により翌日の出荷計画を立てられる点で非常に合理的な生産を可能にしたそうです。また、標高差が大きく天候が不安定な村の悩みに、気象協会ひまわりからの気象情報を直接放映することで農作業に対する備えができて、こちらは大変効率的な仕事に繋がったそうです。（これらは現在も継続中）

このシステムの導入は川上村に強烈なカルチャーショックをもたらし、村民の意識改革に大変大きな影響を与えることになったそうです。農村情報システム導入は現在の成長著しい川上村農業の基盤づくりに役立った大きな出来事です。

曰く、「行政がやることは確たる自信と覚悟をもってやることが重要！」

川上村は一世帯平均クルマ4.7台を保有する一方、高齢者や子供達といった交通弱者の併存もある中で、民間バス会社撤退という事態に【交通】対策が急務となりました。

当時は民間バスと行政バス（スクールバス等）が混在し無駄が多かったことと、バスと鉄道路線との接続が悪く利便性に乏しい運行実態だったそうです。

そこで、スクールバスの住民利用を発想するも許可権者文科省の門前払いに苦勞されたそうです。しかしそこは藤原村長、秘策を持ってついにクリアー。「熱意が勝ち取った」とのこと。こうして日本初の“住民も利用できるスクールバス”運行。JRの協力も得て鉄道路線との接続を良くし、停留所を増やし、割引運賃も導入し、結果運行初日から何と黒字。

この具体の成功事例によって村民が行政にますます信頼を寄せるようになったそうです。

（後日談として、スクールバス運行が黒字化できると、今度は補助金打ち切りといった行政都合の情けない事態に直面することになってしまった。と嘆いておられます）

第3回 まちづくり NEXT セミナーレポート

全国共通のテーマ【高齢者】対策。川上村では高齢者対応拠点として、診療所・保健センター・訪問看護ステーションを複合した[ヘルシーパークかわかみ]を設置。

県内初の村営鍼灸施術所やトレーニングルーム等の併設で利用者が多く、村で最もにぎわっている場所とのこと。

このような取り組みを通じ、少なくとも老化を遅らせることが可能になったとおっしゃいます。現に川上村の“医療費は全国一安い”という実績がそれを証明しています。そこで藤原村長は「健康高齢化率」なる指数を厚労省に提案されたそうですが、健康の基準があいまいとの理由で却下。今は村独自の基準で運用されているそうです。

また、訪問看護ステーションの設置により在宅死の割合が増加。在宅で人々が助け合う環境が醸成され、地域コミュニティの様子が人間的な方向に変化したそうです。

藤原村長は病床にある高齢者のお見舞いを欠かさないそうですが、或る時お宅を伺うと40人ほどの人が集まっており「これは間に合わなかったか？」と。しかし実は近所の皆さんがお手伝いに駆けつけ、家族に代わってお世話している最中だった。というエピソードも。曰く、「人が人を診るという人間独自の習性を生かさないと医療費は無限に増大する！」

川上村には困難に直面した時、知恵を求めて様々な人の協力を得て解決してきた歴史があります。その人資源を多彩なイベントに展開し【交流】を促したことが大変大きな成果となり交流の重要性をますます知ることができた、とおっしゃいます。

また村の日常の交流の場として24時間図書館やハイビジョンシアター等を備える農村文化センターを建設。特に24時間図書館は住民全員がIDカードを持ち、自分の都合で利用できる利便性が大変高評で利用率は非常に高いそうです。

交流の積み重ねによって、困難な課題に積極的に取り組む機運が村に生まれたことが大変貴重な成果で、知恵の輪は拡大し続けている。今では東京に“川上村ファンクラブ”もあるそうです。

加えて、

「三風」（風土・風習・風味）のふるさとづくり

「教育」と「郷育」 ← 地域の教育はふるさと教育

というキーワードも唱えておられます。（時間の関係で詳しくお話を伺えませんでした）

■都市と農村の融合を目指して

川上村の農家には都市部から大勢のお嫁さんが来られています。東京に“川上村ファンクラブ”もあり、川上村と都市との距離感は既に短い関係にあるように思います。

藤原村長のメッセージ、【キドレル農村】 【ファッション性の村づくり】

■川上村の新たな挑戦

日本で一般的なレタスは結球レタス。川上村ではアメリカの大学と連携し、非結球レタスの開発に成功。[リバーグリーン]と[サワーアップ]という2種類の川上村ブランドレタスの生産が行われています。

川上村は台湾・香港へもレタスを輸出しています。(2013年実績170t)

この輸出量も年々増加するため、ベトナムでレタスを栽培し東アジア地域のマーケットに供給するプロジェクトを開始しているそうです。

既にベトナムから研修生50名を受け入れ、川上村農家精鋭がベトナム事務所で活動したりと、プロジェクトは着々と推進中。

川上村はグローバル化に対応した農業政策がダイナミックに進行しています。

■質疑応答の要点

- 村営TVでリアルな野菜市況を見るシステム。他の農家では必要性を感じないかもしれないが、川上村農業には大変重要との判断から困難を乗り越えて実現させた。
- 24時間図書館は完全村営。これは全国初の施設。蔵書も7万冊あり利用率は高い。農家のお嫁さんの内70%が都会から来ており、その人たちの知的感性支援、アメニティとしても大事な施設。
- 農業後継者の70%が大学卒。そのお嫁さんも高学歴。田舎の定住条件は自然の豊かさだけではもはや成り立たない。医療・福祉・教育の充実が絶対必要。因みに、海外から村の視察に来られた方々の通訳をするのは農家のお嫁さん。
- 全国一安い医療費(17万円/人は全国平均の1/2)は、地元の助け合い体制の賜物。高齢者にも仕事があることが大事。生きがい・愛情の対象物・情熱の対象物があることによって元気が持続する。川上村は健康な人と要介護者との二分され、中間の様態者がいない点の特徴。
- 川上村の農地に休耕地はない。身体都合で耕作できない農地があれば他の農家が活用する。しかしこれ以上の生産拡大は労働力不足でなかなか困難。現状は海外研修生によって生産量を維持している。出生率は3.6人だが、減少傾向にある。(田舎×田舎=多産/田舎×都会=少子)
- 川上村は昔から観光産業に手を出さなかったことが農業成功の要因ともいえる。現在では手つかずの自然が観光資源。
- スポーツ界との交流にも積極的な取り組みを行っている。“アグリ&スポーツ”をキーワードに展開する。

以上